

青少年くらし

家庭版

発行
倉敷市教育委員会
編集
生涯学習課
☎ 426-3845

5月



「明るい家庭づくり」作文

家庭の役割、在り方など、日頃から家庭について考えていることをテーマにした作文です。令和五年度は、小・中学校から一、四九八名の応募がありました。市の優秀賞を受賞した作品を二か月にわたって紹介します。なお、優秀賞、優良賞受賞作品は、倉敷市のホームページに掲載しています。

● すきになったてつぼう

船穂小学校 二年 小野 夏妃

わたしは、ここの六月までてつぼうが大好きでした。なぜかという、前まわりがこわくてできなかったからです。おかあさんと学校へ行てれんしゅうをしても、こわいから、「やりたくない。」「できない。」「言てにげていました。おまけにおとつにも、「かんななのに、なんでできないの。」「言われてはらがたつてけんかになったこともあります。そんなとき、おかあさんがてつぼうをかつてくれました。その日のうちに、おじいちゃんとおばあちゃんがてつぼうをくみ立ててくれて、夕方からつくんです。ばんごはんも食ないで、前まわりのれんしゅうをしました。家でくから、「手をはたさないかぎりお

ちないよ。」「ゆくりまわて。」「いろいろアドバイスをうけて、だんだんできる気になりました。さいしよは体をもつてもらててきました。その一かいでじしんがつて、「じぶん一人でやる。」「言てやたら、できたのです。うれしくてなみだがました。みんなのおうえんもうれしかったし、一人でできたこともすごうれしかったです。今ではひまがあれば、「てつぼうをしてくる。」「言ててつぼうをしています。おかあさんには、「てつぼうはもういいから、ベンキようをしたら。」「言われるくらいです。

わたし一人ではむずかしいことも、家々のおうえんでがんばることができました。わたしには、いつもわたしといっしょになてなやみを考えてくれるおかあさん、やさしくみまもつてくれるおじいちゃん、おばあちゃん、おうえんしてくれるおとつがいま

す。

みんなのおかげで、わたしはいやなこともりきれました。家でくのみんな、いつもありがと。これからは、わたしもかぞくがこまているときやなやんでいるときに、力になりたいと思います。

● お兄ちゃんの安心する手

老松小学校 三年 井田 有咲

「有咲行こう。」「

お兄ちゃんが、げんかんでわたしに向かつて手をのばして言た。その手をにぎって、はじめて二人だけお買いものに行た。

夏休みがはじまつてすぐ、お母さんがかせをひいた。朝九時になてもお母さんがおきなくて、ゴホゴホせきをしてしんどそうだった。おなががすいてきたから、お兄ちゃんと二人でお買いものに行くせんををした。二人だけお買いものに行たことがなかつたので、どの道行くか、何をかうかなどいろいろ決めた。それで、わたしがお母さんに「おなががすいたから、二人でお買いものに行てきてもいい?」と聞た。そうしたら、お母さんはすぐに、「いいよ。二人て手をつないで行てね。」「言たので、うれしくて、お兄ちゃんとハイタッチした。お金をもらててカバンの中にちゃんとしました。それで、げんかんでお母さんとバイバイして、お兄ちゃん

と手をつないで出た。

お兄ちゃんと手をつなぐのは、ひさしぶりだった。一年生と二年生の時わたしはお母さんとはなれられなくて、学校になかなか行けなかった。お母さんにつれて行てもう日もあつたけど、お兄ちゃんと歩いて行く日もあつた。その時は、ないているわたしの手を、お兄ちゃんがぎゅつとにぎって、学校につれて行てくれた。お兄ちゃんの手は、いつもあたたかくて、お母さんとはなれても安てきた。でも、三年生になてからは、お母さんがいなくても学校に行けるようになったから、二人て手をつないで学校に行くことがなくなつた。ひさしぶりにつないだ、お兄ちゃんの手は、ちよつと大きくなつた気がした。でも、お兄ちゃんの手は、前といっしょであたたくて、お店まで安心して行た。

お店に着てからは、二人て食たいものとのみものをえらんだ。あとは作せん通り二人でお金の計算をして、あまつたお金、お母さんの食られそうなゼリーとジュースも買った。お金をはらう時は、ちよつときんちよつしたけど、お店の人がやさしく教えてくれた。帰りも、また二人て手をつないで帰た。早く家帰たかつたから、走て帰ることにした。家に着いたら、つないでいた手が、あせてびちよびちよで二人てわらつた。買てきたゼリーとジュースをわたすと、お母さんはすぐ

くよろこんでくれて、わたしもお兄ちゃん



多津美中学校
3年

若林 大河
(令和6年度)

「猛虎の
咆哮」(水墨画)

全体的にバランスが良くなるように、意識した。ひげも目立ちすぎないようにかすれさせたりを工夫した。

もともつれしかった。それから、買ったごはんを、お兄ちゃんといろんなお話をしながら食べて、いつもよりおいしく感じた。

二人だけでお買ものに行つて、少しお姉さんになつた気がした。お兄ちゃん、またいつしよにお買ひもの行こうね。その時も、いつしよに手をつないで、お話をいっぱいしながら歩いて行こうね。

●夏のばあちゃん家

玉島北中学校 一年 加集 滯

私は今年の夏二年ぶりにばあちゃん家泊まりに行つた。小さいころは、毎年夏になるとばあちゃん家泊まりに行つてゐた。けれど、この二年間は、行きたくても行けない理由が

あつた……。

三年前の秋、じいちゃんが救急車で運ばれた。そこからじいちゃんは、入院と退院をくり返した。私が五年生の夏はあちゃんに

「今年の夏は、じいちゃんの介護で忙しいからお泊まりはなしね。」と言われた。少し残念だったが、まあしょうがないかと思えた。六年生の夏、じいちゃんが亡くなった。葬式や法事で忙しかったため、夏のお泊まりなんか話すら出てこなかった。

そして、今年の夏がやってきた。二年ぶりに夏のお泊まりが再開されることになった。私は嬉しくてたまらなかった。この日を待っていたのだから。久しぶりに泊まるばあちゃん家は、なんだか新鮮で、けれどどこか安心感があった。

昔のことを思い出しながら過ごしているとはあちゃんの変化に気付いた。この二年間で色々あつてなのか、歳をとつてなのかわからないけれど、少し疲れているばあちゃんがいた。いつも見ていたばあちゃんのラジオ体操が、

六時半ではなく八時半になっていた。ばあちゃんと言つた時に、話の内容を二度言わないといけないことが多くなつてゐた。たつたの二年間なのに、こんなに変わつてしまふんだと少し驚いた。それと同時に、少し怖くなった。『ばあちゃん、いなくならないよね?』『そう思うところがある』

ちゃんと色んなことをした。

一緒に花火をした。暗い夜に、ぼつんと光る線香花火は、少し儂く、美しかった。なんだか命みたいだなと思った。ばあちゃんと一緒に買い物に行った。いつものように「ばあちゃんお菓子買っていい?」と聞いた。ばあちゃんは「しわいっぱいの笑顔で、もちろんいいよ。」と言った。私はすごくなつかしい気持ちになった。かわりない、ばあちゃんの笑顔や私たちを甘やかしてくれるところ。最初は変化ばかりで驚いていたけれど、やっぱり変わらないところもあるんだと、少し安心した。

夜ご飯は、みんなで一緒にハンバーグを作った。私が肉だねを作り、お兄ちゃんがにぎり、おばあちゃんが焼いてくれた。味はもちろん百点満点。作る時も食べる時もみんなであつたので、おいしさも楽しさもどんどん増えていって、忘れられない味になった。おうちに帰った後は、みんなでふとんをしいて一緒に寝た。

次の日の朝起きると、ばあちゃんは今もつんとにいなかった。私がねげながら、リビングに向かうと、そこには元気にラジオ体操をしているばあちゃん。私の心がとんとんほぐれていく。ばあちゃん家に来たばかりのときは、ばあちゃんのおとろえている姿に驚いていたが、ばあちゃんは、とても元気だった。今をしっかりと生きていた。

その日は、昼近くからみんなで甲子園を見た。私は、いつも甲子園を見ているわけではない。けれど今は、ばあちゃんと一緒に何かを楽しみたいので、甲子園を見くみることにした。夕方になった辺りで、ばあちゃん家にとっ達が来た。みんなでスイカを食ったり、テレビゲームをしたりした。お話もたくさんして、あつという間に時間が過ぎていった。

もう帰る時間になった時、私は「ばあちゃん」と別れるのがさみしかった。そして、ばあちゃんを一人にするのが心配だった。夏のお泊まりの時には、私達やいこ達も来て、にぎやかになるけれど、ここで別れたら、ばあちゃんはまだ一人になる。

「大丈夫かな。さみしくないかな。」
その時はあちゃんが、
「みんな、じいちゃんにもさよならしてね。」
と言った。その時私は、はつとした。『じいちゃん、去年亡くなつてしまつたけれど、完全にいなくなつたわけじゃない。ばあちゃんや私たちの心の中に、ずっとい続けている。だからばあちゃんは、決して一人なんかじゃないんだ。』そう思うと私は、じいちゃんとはあちゃんに、「バイバイ、またね。」と言ひ、家を出た。
夏の夜風にあたりながら車は進みだす。げんかん前から手をふつてくれるばあちゃんに負けじと私も全力で手をふり返した。

(おわり)